



第八十三号

会報

浄土真宗

太陽の会

孟蘭盆会

8月14日(木)午前十時半より太陽の塔桜ヶ丘三階本堂にて江崎宗一郎師を導師に孟蘭盆会を執り行いました。多くの皆さまにご参詣いただきました。孟蘭盆会は『孟蘭盆経』というお経によると、お釈迦さまの弟子、目連尊者の母親が餓鬼道に落ちて苦しまれているのを知り、お釈迦さまにどうしたら救えるのか教えをいただきます。その方法が七月十五日に多くの高僧たちと供養したならばその功德により救われるというものです。目連尊者は無事母親を救われそれ以降浄土真宗では、「歓喜会」ともいわれる方々を偲び、阿弥陀仏の本願に触れる大事な機会だとしています。

江崎宗一郎師のお説教



降誕会

5月21日(水)太陽の塔桜ヶ丘にて浄土真宗の開祖、親鸞聖人のご生誕を祝う法要。降誕会法要を執り行いました。平日の午前ではありましたが皆様と共に『歎異抄』のお言葉に触れながら親鸞聖人のご生涯に思いをはせ、ご誕生の縁、今もつて阿弥陀仏からの救いをいただいているご縁を喜ばせていただきました。ご縁がございましたら、どうぞ皆さまお参りください。



竜王院 読経会

「四十八願」の中で5番目にあたる「私が仏となるとき、私の治める仏土の人々が、自身の過去世を知ることのできる力を得られず、計り知れない遙か過去のこと一切を知ることができないならば、私は悟りを得ない」というものです。過去世を知るといのは古代インドの輪廻思想からすると、なぜ今このような人生を過しているのかの原因を知ることです。阿弥陀仏がお誓いになられたのは、ただ己の過去世を知ることができるといことではなく、知ったうえで客観的に今を理解し、冷静に受け入れ、無知であったが故の煩惱を消すことであり、自力でどうにもできないものについては阿弥陀仏のおはたらきにより取り払われるというものです。あらゆる手段ですべての命の苦しみを取り払おうと誓いを立ててくださったこと、そのおはた



らきが計り知れない遙か過去から今この瞬間のために、ずっと私たち一人ひとりを目掛けて建てられたものであることを知らせていただくようなあたたかさを感じさせていただきました。

令和七年 行事計画

○本山(福山)

秋季彼岸会 九月二十二日(月)

開式 十時

○竜王院

読経会(予定)

九月十一日(木)

十月十四日(火)

十一月十一日(火)

十二月十一日(木)

○川上太陽霊園(鹿児島)

秋季彼岸会 九月十三日(土)

開式 十時

○餅つき大会

十二月六日(土)(予定)

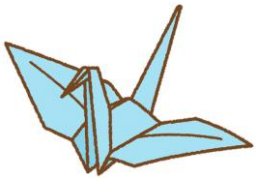
*どなたさまも気軽に「ご参拝ください。はじめての方のお参りも歓迎しております。



終戦80年に思いを寄せて

昭和20年8月14日ポツダム宣言の無条件受諾による降伏を日本政府が連合国に通告、翌日15日一斉に日本国民に日本生降伏が公表されました。これにより昭和14年9月より始まり、6年間に及んだ第二次世界大戦は人類史上最大の死者を生み、終わりを迎えました。今年は終戦80年の節目と言う事もあり、関連の行事も多くあります。天皇陛下も各地で亡くなられた方々や、苦難の道を歩まれた方々に、改めて心を寄せていきたいとおっしゃられ広島、沖縄、長崎といった各地域に訪れられています。広島にいらつしやった時には被爆者の方から原爆が落ちた当時の話やそこからのどのように歩まれて来られたの

か様々なお話しをされました。戦争の歴史は調べることはできても実際に経験を書くことができる機会は少なくなってきました。争いの根本は私が正しく、相手が間違っているという勘違いです。自分だけに都合の良い正しさでは平和は訪れません。中国の高僧善導大師が著された『往生礼讃』には、阿彌陀仏に対する礼讃(礼拝と礼拝)と礼懺(礼拝と懺悔)が示されています。南無阿彌陀仏のお念仏には阿彌陀仏を讃嘆する心と自己の愚かさを懺悔する心が一つになつていきます。自らを振り返ることの大切さに気付かされることも、善導大師が示されたお念仏のはたらきなのです。



僧侶のひとりごと

今年も暑い日が続いておりますが、会員の皆さまはお変わりありませんでしょうか。酷暑が続く中、暦の上では立春(8月7日)秋の気配を感じるころ、処暑(8月23日)暑さがおさまるころ、白露(9月7日)しらつゆが草に宿るころとされていますが、まだまだ夏真っ盛りというような気候となります。暦の上では、もつと秋を感じることができる気候となつても良い筈なのですが…。我慢が美德とされ、少々の暑さ寒さは我慢してどうにかなるというのはひと昔前の話で令和の今では命に関わりますので、我慢なくお身体を大事にお過ごしください。それでは、夏の疲れを癒して秋の夜長をゆったり過ごしましょう。

五月〜七月のことば

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃると思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【五月のことば】

仏さまというのは

向こうから私のところへ

いつも来ているはたらきです



「近田昭夫」

仏さまというと私たちと懸け離れた尊いお方とお敬い申し上げますが、それは尊敬ではなく敬遠しているのです。生きた仏さまのはたらきは、いつでも、どこでも、誰にでもいきいきとはたらき、向こうから私のところへ、いつでも来

てくださります。煩惱具足の愚かな私を、そのまま救おうと思し召す阿弥陀仏の教えに大きな変革を受けるのです。

【六月のことば】

何に遇ったのか

それによってその人生は決定する

「梯 寶圓」

私は何をするために生まれてきたのでしょうか。人生には嬉しいこと、悲しい事、心から感激すること、辛すぎて涙すること、いろいろなことがあります。お釈迦さまをはじめすべての仏さまは、阿弥陀さまの本願を説くために生まれてこられました。私はその本願を聞くために生まれてきました。しかし煩惱から離れて生きていくことはできません。親しい人との別れは悲しいですが、亡くなっていられる方は本願に遇いお浄土に生ま

れて往かれました。命が終えてもありがたい世界があります。本願力に遇ったものは空しく過ぎることとはなく、必ず救われるのです。

【七月のことば】

老いや病や死が

人生を輝かせてくださる

「湯浅成幸」

私たちにとっては、老いも病も死も、除かれるもの、不幸なことではなく、老病死によつて生の豊かな営みを教えられます。老いるから、病になるから、死ぬから不幸なのではありません。もしこれらがまったくの不幸なら、私たちは生きている限り不幸せでしかありません。如来の大悲を聞かせていただくことで、老いや病や死が、苦しみや不幸のままでなく、かえつて私たちの人生を輝くものにすると気付かせていただくのです。